

共同研究グループ「シビル・ベテランズ&ボランティアズ」活動状況

近畿大学理工学部 正会員 谷平 勉 酒井 貞
(株)奥村組土木技術部 正会員 中山 学 F100-会員 井上隆司

1. まえがき

明治時代の土木技術者で、日本人で只一人パナマ運河建設に従事し、その技術を日本に持ち帰り、荒川放水路や信濃川大河津分路の建設に携わった青山^{あきら}士さんがおられます。この青山さんの碑文に「人類ノ為メ国ノ為メ」という言葉がある。しかし、土木学会では、「土木技術や社会資本のあり方に関して一般社会への積極的な取り組みが不足している」との認識に到達している。

すなわち、20世紀後半の我が国がその発展過程で指向してきた効率化と専門分化に伴って、横断的連携が損なわれてしまっている。土木を生業としてきた技術屋が一線を引いて社会的要請に応えるために何ができるかという視点から、動き始めたグループの活動状況を報告する。

2. 研究グループ設立の背景

社会基盤を支える土木事業は、公共の利益を考慮する行政の計画と営利を目的とする企業活動によって実施されてきた。土木技術者はその行政あるいは企業の一員として社会に役立つ気概をもってその役割を果たしてきたが、遅ればせながら、わが国も成熟社会へと向かう過程において、生活者としての主体性が求められている。すなわち、土木技術者が従来の組織の枠を越えて、社会基盤整備において一社会人として責任ある行動をとるよう求められている。このような活動の連携によって、いまの土木界の抱える多くの社会的な問題の新たな展開が期待される。土木事業は組織単位に行われ、その構成員である土木技術者個人はほとんど表に出ないシステムとなっている。土木構造物が“無名碑”と言われる由縁である。その土木技術者は定年退職後、突然個人に戻ってしまう。そして、組織的なケアは皆無に近い状態となり、土木技術者として高度の能力を発揮できる場がなくなる。高い見識のもと、生活者の視点から社会基盤整備に貢献するシビル・ベテランズとして活動できるのではないだろうかという見地に立ち、CVV (Civil Veterans & Volunteers) は、主として「土木」の仕事に長年携わってきたベテランたちにより、土木に関する様々な情報発信・活動を通して社会貢献することを目的に1996年4月に構想され、「まちづくりグループ」と「アドバイスグループ」の2グループとして組織化されて活動を展開している。

3. 調査研究項目と活動成果

3-1. 「まちづくりグループ」の活動内容

「まちづくりグループ」の2003年度の活動テーマを「御堂筋研究」とし、CVVメンバーを対象に「この指とまれ方式」で御堂筋研究グループを募集したところ、20名近いメンバー（谷平、中尾、酒井、北村、鉤、村上、赤尾、角野、小林、隅野、近藤、池亀、妹尾、土井、磯村、平尾 順不同）の参加が得られて、4月に発足した。なお、「MID-G」（「MID」は御堂筋をイメージした略称）のメーリングリストで構成メンバー間の連絡、情報交換を図った。また、活動の拠点を大阪市中央公会堂の会議室に置いた。重厚で快適な雰囲気と利用料金の低廉さが選択の理由である。月一回の会合を原則とし、2003年4月から04年1月まで、延べ11回の会合を開催した。毎回概ね10名前後の参加メンバーで闊達かつ濃密な論議が行われた。

まず、御堂筋にまつわる歴史や技術資料などの収集などを通じて、「21世紀の御堂筋のあり方について何かを発信して行きたい」との観点から、御堂筋の主演を演じた関^{はじめ}一元市長のことも勉強することから始まった。

大阪市の都市計画、道路計画等に関する資料の収集を行った結果、三田純市の「御堂筋物語」が網羅的なガイドンスとなることがわかった。御堂筋を南（大丸前）から梅田までの探検によって実体験もした。

Tsutomu TANIHIRA, Tadashi SAKAI, Takashi INOUE and Manabu NAKAYAMA

次に、関一の行動と思想に関する話題提供を受け、ベルギーへの留学の話、工業都市へのイメージをシンボルとして御堂筋に凝縮させたのではないかと、という話題となり、御堂筋ないしは大阪のまちづくりにかかわる「年表」の作成を行うことが重要であるとの議論の結果を得た。

「大阪大都市計画をめぐる関一が何を考えていたのか」を主要な議論内容として、関一の経歴と業績の概要のまとめた。すなわち、1900年代初頭にさまざまな状況を見、欧米にも学んだ知見など「関一の頭の中」を見ると、現代、われわれの置かれた状況との類似性が多いこと、そしてその上で100年先にまで及ぶ洞察力を発揮したことに学ぶべきことが多いことに思い至った。本グループでも、方法論として同様に100年先を見据えた議論を進めるために現代の諸外国のまちづくり事例を集めることが重要であるとの結論に達した。

そこで、表－1に示すような諸外国都市の事例として、韓国と米国について研究し、その他合意形成に関する討論を行った。

表－1 諸外国都市の事例

韓国	ソウル		高速道路撤去河川復旧による都市軸形成プロジェクト
米国	テネシー州	チャタヌガ市	ゼロエミッションで環境回復
	カリフォルニア州	バーババンク市	資源ゴミ・リサイクルに成功
		デビス市	環境保全型農業と自転車サイズの都市

諸外国のさまざまなまちづくりの取り組みをみると、それぞれの地域がそれぞれに抱える課題をそれぞれの技術や方法論などを市民参加で解決しながら、自分たちの地域形成をはかっていることがよくわかる。少なくとも関西圏くらいの範囲で地域ごとに独自の先進的まちづくりコンセプトを持ち、それらが緩くつながる構造を基本認識として100年くらい先の都市像を

提言する、その中での御堂筋の役割位置づけを論じる、このような方向で今後の議論を進めることを予定している。

3-2. アドバイスグループの活動内容

次の2点を軸に活動し、成果を上げると共に課題の抽出を行った。活動には CVVホームページを活用した。

1) 一般市民の土木事業への理解を支援市民

- ① 市民見学会 「春風の毛馬に遊ぼう」(参加：24名)、「上町台地にある緑の森を訪ねて」(参加：37名)、「日本最古のダム式狭山池と博物館」をめぐろう」(参加：15名)、「庭窪浄水場 高度浄水処理設備他」(参加：39名)の4回市民見学会を企画・運営を行った。
- ② 「土木の教室」等(神戸市主催)支援 「花のフェスタ2003」(神戸市)、「土木の学校(仮称)」第1回ワークショップ(大阪駅前第2ビル)、「土木の学校(仮称)」発足会(神戸市)、「市民と町の研究」現地調査 兵庫津チーム、生田川チーム(神戸市)、「橋の模型をつくろう」(神戸市)、「土木の教室」(神戸市)、「神戸の土木史跡探訪「兵庫津とその周辺」(神戸市)などを支援した。
- ③ イベント支援 大阪中泉尾小学校6年生対象に「大阪探検」の講義と現地案内、淀川を考える第58回「毎日ハイキングクイズラリー」,「“淀川の常識 豆知識”」を説明,「光のルネッサンス2003 IN OSAKA」で「お箸で橋をつくろう」「ブロックアーチで力学を学ぼう」などを企画・運営,近畿大学3回生を対象に大正区近郊「土木史」探訪の運営などを行った。また,「お箸で橋を作ろう」というイベントを3回実施した。

2) 土木技術の伝承、人材の誘起・育成

青少年向け、総合学習への支援として、次の10回の出前講師を派遣している。中央実務専門学校(2回)、神戸市立高専(1回)、大阪大学(1回)、近畿大学(1回)、大阪工業大学(2回)、立命館大学(3回)

4. CVV総会(3月4日に実施、共同研究グループワークショップとして)

毎年1回総会を開催し、各グループの活動報告と次年度の活動方針の確認・共有を行っている。平成15年度も去る3月4日に開催し、活発な議論、意見交換を行った。

5. 今後の予定

上記の2グループの活動をさらに推進するとともに,「防災グループ」も近々立ち上げる予定である。なお,ホームページのアドレスは <http://structure.civileng.kindai.ac.jp/cvv/> である。

(参考文献) 御巫清泰:土木技術者の気概の高揚を目指して!,土木学会誌 Vol. 89, No. 1, pp. 7-13